

秋田県出身の佐藤さんのスライド

ふるさと Something NEWS

第10回

地方(ふるさと)の地域資源を活かす ——愛媛の浦和盛三郎から学ぶ

一般社団法人 洗楓座
一般社団法人 e f c o . j p
代表理事 佐藤建吉

▼地域の未来を構想

先月、NHKのTV番組で感銘を受けた。愛媛県の南東地区に、住家の苗字が、魚、漁具、野菜となっている村落があるという。鈴木、浜地、木網、麦田、大根、粟野、などである。明治政府による戸籍法定で、苗字を村民全員がもつ時代になるの、その地の浦和盛三郎という若い地主が、住民と相談して、地域振興を目的として新しい苗字を考えたという。大型魚はまだ捕獲していなかったのに、スズキ

三郎が、住民と合意しながら進めていく様子をアニメで表現していた。苗字の制定を切っ掛けに、地域の未着手の資源を活かし、他地域、さらに外国(このTV番組では英国)に負けないように構想し、事業化したという。時代を先取りするのは、魁となる要人と、それを支える住民との連携が必要である。

二人目の岩手県盛岡市出身の山崎慈三さんは、杜と水の盛岡の自慢が満載であった。地名の歴史、政治経済文学芸術スポーツの出身者、名産品・観光・温泉地などを巧みにプレゼンした。人口30万の県都は、奥行きが深い。地方都市の魅力に満ちている。

▼地方再生は経済自立

地方再生・地方創生は、国の重要な政策で、担当大臣により、東京一極集中の問題解決と地方振興が進められているが、依然として途半ばである。

持続可能性という言葉の裏で、もはや、「持続可能」よりも「存続」が危ぶまれている。しかし、認定NPO法人環境工

葉大学倉敷研究室の「永続地帯2018年度版報告書」は、①食料自給率が100%を超えた市町村は566市町村、②1

▼故郷自慢プレゼン会

最近、故郷を自慢するイベント「なみへい」の故郷自慢プレゼン会が、東京の神田の「全国うまいもの交流サロン／なみへい」で行われた。夕6時半から10時まで、35人が集まった。

「なみへい」の故郷自慢では、郷土の食自慢も体験できる。今回のイベントでは、も一つ新機軸として、「ふるさと快活」の考えと一致する取り組みが紹介された。地域に果たす大学と大学生の役割について、現役教授が、大学の今日的教育理念と関係について講演した。担当は、淑徳大学

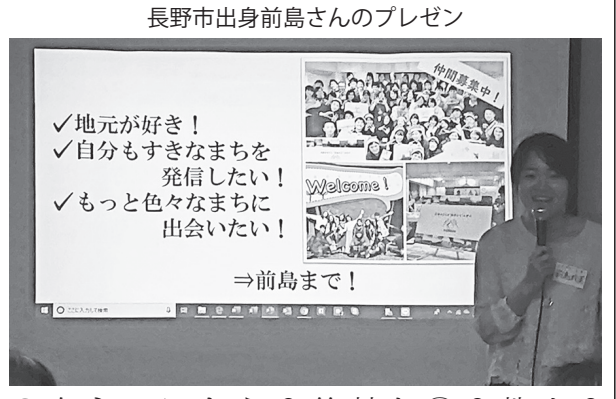
めるのではないだろうか。

なにもない？ だけどそれが良い。

地方再生・地方創生は、国の重要な政策で、担当大臣により、東京一極集中の問題解決と地方振興が進められているが、依然として途半ばである。

最初、秋田県東成瀬村出身の佐藤時子さん。コンピュータでのプレゼンは、やったことがないというが、千葉の淑徳大学の学生が上手にスライドをつくってくれ、愛郷と自慢に満ちた地元密着のプレゼンには、感激した。秋田の自然と伝統がまぶしい存在であった。

食料とエネルギーが自給できるのであるか



長野市出身前島さんのプレゼン

00%エネルギー永続地帯は100市町村、③②のうち、58市町村が食料自給率でも100%を超えている、と報告している。

連載・A-I